「オオハク（cy・cy）コハク（cy・co）の嘴峰（シホウ）正面像による野外識別私法その他の考案」

（第一部）

三上士郎

昭和41年1月号の「野鳥」誌に、私は上の題を掲げての拙文を記した。その内容は誠に汗顔の至りにつきるもので、かなりの誤りを犯しており今にして思えば、よくもまあぬけぬけとあんなものが書けたものと思うのだが、幸い、この追試が例えば島根の中海の諸氏によって行われ、従来そこの白鳥群への漫然たる観察にメスが加えられ、その結果、此処のものの殆んどが今まで言われてきたオオハクではなく、コハクが主体で、オオハクは極めて少数であることが分ってきた。

この意味では私の種々の誤謬を含む方法でも、何かしらの役を果した訳だが、同時に、私自身にはどうも不満足な点が次々と現れて来たので、同46年5月号の「しまね野鳥」に「白鳥失敗記」など補正文を寄せた。

しかし、これとても今になってはなお意に満たぬものであり、まして「野鳥」への文に対しての色々な批判には何等応えていないというひけめが感じられてならない。

当然私としては、現在まで自分で調べ上げたものをまとめ、誤りは卒直に詫び、不足を補い「野鳥」関係の大方の了承を得ねばならぬ責めがあったのだが、離事に紛れ、現在に至ってしまった。

たまたま、本年三月廿七、廿八両日、「ウトナイ湖」で亜成鳥についての研修会があるというので、私も出掛けてみた。

その折、研修主旨以外のことでもという松井氏のすすめで、例の私法識別についてのいささかを来会の諸氏に披露したが、これもまた短時間で意をつくしえぬ憾みがあった。

しかし、松井氏は、全国数カ所でいまだにオオハク・コハクの大体の区別さえ存じておらない方々もあり、全国総合調査に少なからず困惑されており、私法はそういう方々にはいくらかは役に立つだろうと申されていたので、おこがましくもこれを行なったのだが、当日出席された人々は、すべて右の二種の区別は、その声、側面像、鼻腔の所在、体型の大小、首の太さ、湾曲のし方、さらには、シェルエットによってだけでもことごとくこれを知っておられる方々ばかりで、私の発表は何等の意味もなさなかった訳だが、その後本部の本田氏から、会長名をもって、その概略だけでも書き送るよう要請があったので、あえて、「野鳥」誌に書く以前に、ここにまたまた一文を草する次第である。

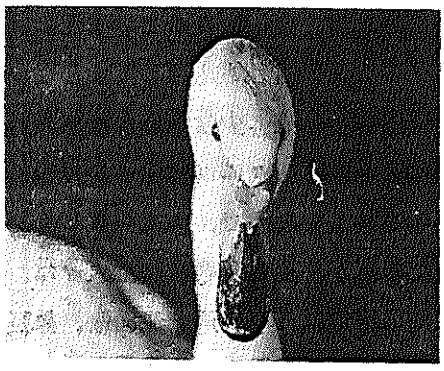
前記「しまね野鳥」にも記した通り、猪苗代湖においては、堀内氏によれば、コハクについての私法の適確率はせいぜい40％位のものとのことで同湖をみていない私も率直にこれを認めるのに吝かではないが、しかし、私法がそうした重大な諸種の欠陥をもちながらも、現在なお咄嗟（とっさ）の識別（例えばTVや群集写真等の瞬間判定）には、外の人々の唱えるものよりも、更に秀れている点があると自負しているので、非才を省ずに筆をすすめる。

その前に私法にはなるべく、風を背にうけて行なっていただきたい。これは、あくまでも正面像を得たいためだが ― 従って白鳥群が首を双眼鏡プロミナーによる観察者の方に向けているのが好ましいからだが、別に風の吹かない日でも彼等の

動きをよく見ていると、必ず正面を向いたり、嘴峰（シホウ）の裏側までも露呈することがしばしばあるので、あえて前出にこだわる必要もない。

(1) 「オオハク」について（cygnus cy・cy (L)）（私法のcy・cy）

Ⓐ 写真正面上側



（№1）

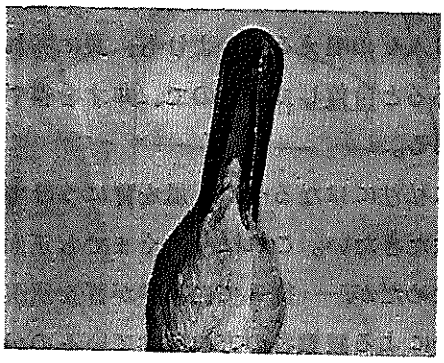
写真（№1）に示すごとく嘴峰（シホウ）尖端からみて、黒・黄と、それから頭部の白色に移行する。（ただし、この場合、次号第2部に詳述するように、この型でもコハクが存在するからご注意を乞う。）

Ⓑ 幼鳥正面上側

これは成鳥と同一。ただし、成嘴の黄が極めて鮮明なのに、この場合は灰白色、長ずるにつれて薄い黄を加える。

しかし、オオハクの成と幼とでは、その全体の羽色によって、すでに区別がつくから、これは別に重大とは言えない。

Ⓒ 成嘴裏面



（№2）

写真（№2）の如く、周囲の黒によって囲まれた凸の鋭い黄色の存すること。この裏面は観察が困難だとする人々も多いが、彼等が水を飲むとき、羽をつくろう時等々、比較的容易にこれが見られる場合が多い。

Ⓓ 幼嘴裏面

これは正面像上側の場合と同様、右の鋭い成の黄の部分の灰白鳥、長ずるに及び黄ばんでくる。

ただ、ここで注目すべきことは、成嘴正面上側の黄色の部分に種々の黒い條、点、線、あざ等の多様なものもみられることである。

（№5）　（№4）　（№3）

上図（№3）（№4）（№5）等は、その中のごく一部だが、私のこれまでの大湊、小湊、瓢湖小川原湖沼群での観察でも、実に数十種のものがあり、特に（№3）は諸氏のすでに日常目撃されるところであろう。（幼鳥時代から成鳥に至るまでY字型を呈する）

なお、私の現在までの42羽の傷鳥飼育からすれば、もちろん餌育という条件ではあるが、嘴上面黒点条等は、極めて不安定で、消長のあることを意に留めてほしい。（一部コハクの裏面についても同様であるが、これは後記する。）

(2) 「コハク」について（Cyg.Columbiemis Bewj chii Yarrel 及 cy.co.Jankowshii Alpholaky）（此の場合cy.coとする）

Ⓐ 成・正面上側

写真（№6）（青森五所河原）は、私のい

（№6）

わゆるＩ型とするもので嘴尖から黒１色のまま頭部の白に移行する。（従って、鼻腔は当然黒色の中に埋もり、オオハクにおいては黄と連る）

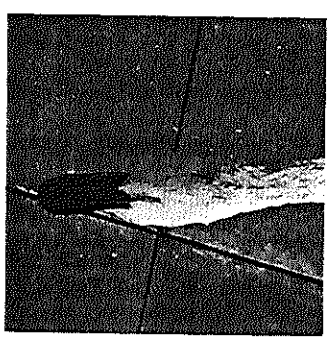
Ⓑ　幼正面上側

（№7）の如く、ピーター・スコット及び堀内等の説く通り嘴尖のみ黒、それより肉色となり、頭部灰色に続く。（これは昭和４８年１月当大湊で左翼を傷め、飛行僅かに千米位で、地区に移動がかなわず、殆んど成熟化した時点まで当地にとどまりついに野犬に咬殺されてしまった個体である）

（№7）

Ⓒ　成嘴裏面

（№8）に示すものは（№6）と同一個体の裏面であり、全部黒色で示される。（ピーター・スコット氏及び松江の根岸氏によれば、その一部のものに、オオハクの裏面と同様のものを示されているが、私の今までの例では、それが得られていない。



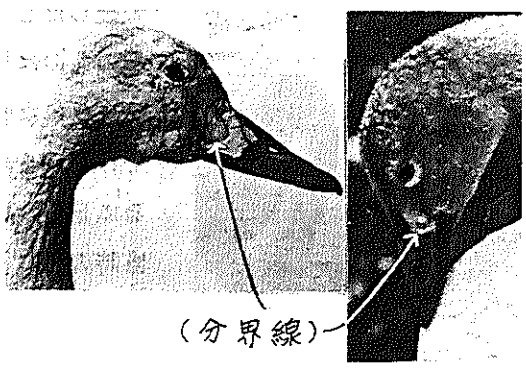
（№8）

Ⓓ　幼嘴裏面

（№9）に見られるように、相当早期に黒化がすすむ。これは（№7）より約１カ月前のものであるが、上面の黒化が未だ進まぬ中に裏面が黒完成像を示している。

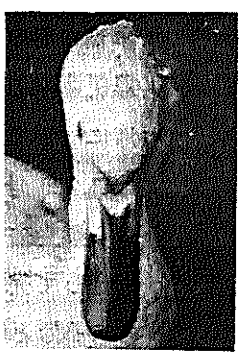
（№9）

なお、写真（№10）の如く、将来黒化し、黄部と接すべき分界線が、すでに認められている。



（№11）　（№10）

（昭和４８年２月（№10）　昭和３５年（№11）共に於大湊）このコハクＩ型上嘴の黒化進行機序について、私は、昭和３５年、当地へ一時着水したものが、心ない人の仕掛けた「ワナ」にかかり死亡した同一個体（№11）（№12）の正面像において嘴尖端から頭部へ伸びる黒と、頭部から嘴尖に向うものが、癒合する結果完成するであろうとした。（「野鳥」３３５号）



（№12）

写真（№13）は

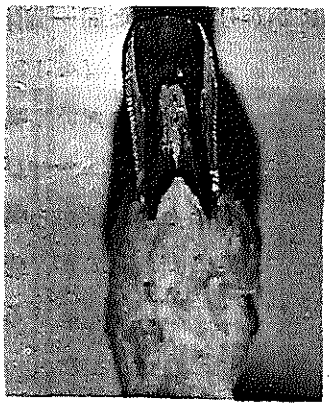
（№13）

（№7）（№9）（№10）と同一個体だが、ややこれを証している如くであり、頭部より嘴尖に向う黒化が進みつつあることを示している。

所が、私は昭和41年4月号「小説新潮」の瓢湖の白鳥の中のアンケート写真に（№14）の如く、すでに上面の黒化の完成しているのをみて驚いた。その後しばしばこの種のものは見られるようになり現在ではもはや珍とするに足らないが、当時の私にとっては、これは正しく驚異であり、嘴峰調査への心を益々湧きたてた。

（№14）

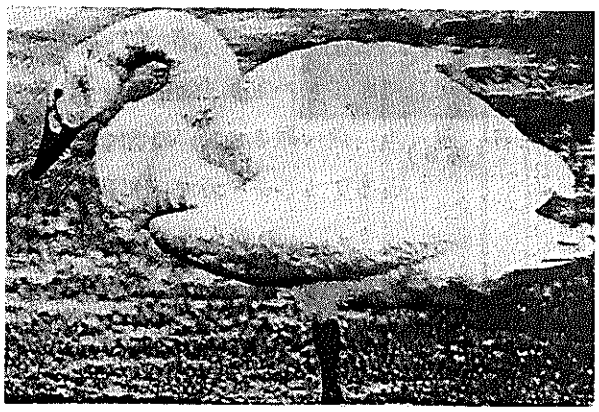
（№14）は恐らく同年3月頃の撮影によるものと推定されるが、これによると私論の如きものばかりでなく、嘴上面肉色のいずれの部分（ただし初期は尖端のみ黒（№7））を問わず黒化が進むものもあると思われる。



（№15）

なお（№11）（№12）の幼鳥末期のものも嘴裏黒化に至る形成機序について同じく野鳥225号に周囲から黒色班が将来癒合して完成するであろうとした。（№15）

しかし、図（№9）と比べるとこれまたどうも私説の通りのものばかりではないであろうことを示している。



（№16）

さて写真（№16）は（№7）等一連の同一個体が当地に残留中、略成鳥化した一例である。これは同年5月19日まで当湾に残存したことは事実だが、その後において干潟上で野犬に咬殺されたものである。ただ、実際この鳥が飛行可能であれば、すでにこの時期は、日本には留まっていないはずの貴重な個体であった。頸部になお灰色を残し、明らかに亜成鳥の像を呈しているのは興趣深くこの時期のものは恐らく日本以北でのみ観察可能なものであったろう。なお亜成鳥について触れたついでに一言すると、私の今までの全幼傷鳥飼育の経験からすれば、冬期間収容されたものは夏の本格的換羽期が過ぎると11月初めにはもう頭部にわずかに黒の「ゴマシオ」斑点を残すだけでもう遠目では成鳥との区別は不可能となる。

もっともこれは、飼育という条件ででではあろうが、私は春から秋にかけては、クローバーとか、スギナ等の粗食をあたえ、なるべく野生に近い状態でこれを行なった。

結局「白鳥」の幼鳥は、外観上はフ化後満1年4、5カ月位で、殆んど成鳥と同色の白に変化する。すなわち春3、4月日本を離れ、帰北した彼

等が、シベリア・北極圏に滞留中に、従来言われてきた亜成鳥の時期—すなわち頸部のみの灰色残留の時代があるものと考えられる。

紙数の制限もあり、次回第2部はなお重大だが以上をもってひとまず第1部の筆を擱く。

「第2部」では、私のいわゆるコハクⅡ型及び「ダイヤモンド形」のオオハク・コハクについての私説を示したいと思う。諸氏のご叱正を得ることができれば幸いである。　（51.4.25）

白鳥の野外識別メモ

特に成鳥・亜成鳥について

吉川吉枝

A　雛（推測）	1. 孵化してから親鳥の管理の下で生活している。 2. 形はまだ白鳥の幼鳥・成鳥の体形にならない。 3. 羽毛は幼羽で色は薄茶色である。 4. 生後2ケ月〜3ケ月くらい？		次秋、渡来期には全身白色になっている。 5. 親とともに生活している。
B　幼鳥	1. 形は白鳥の体形になっている。 2. 羽の色は、はじめは灰色である。 3. 嘴の黄色部が鮮明でなく白ぽい。ピンクが混っている場合もある。 4. 春、換羽が進むと翼は白色を帯び頭部も白斑が出てくる。	C　成鳥（生後4年目くらい）？	1. 全身白色。 2. 嘴の黄色部が鮮明である。 3. 幼鳥と共に生活している。
		D　亜成鳥（生後2年目〜3年目くらい）？	1. 全身白色。 2. 嘴、鮮明な黄色である。 3. 外見は成鳥と同じだが、繁殖能力がない。 野外識別困難。 4. 亜成鳥群に独身の成鳥も混っていると思われるが、いずれにしても、識別困難。

集計結果から見た
ハクチョウ類の識別と成・亜・幼区分上の課題

観察例	親子群	集団	集計表記載例 (1)	誤記しやすい例
色識別基準	白色：灰色	白色：灰色	白色：灰色	白色：灰色＋？
識別区分	成鳥♂＋♀：幼鳥	成＋亜成：幼	成＋亜成：幼	成：幼＋(亜成)
識別数	2羽：1〜6羽	281：76	多数：少数	多数：少数？
総数	3〜8羽	357	総数	総数